★岡本裕成先生（鎌倉市立第二中学校美術担当教諭）の実践が紹介されました。

開龍堂出版発行「造形」2020NO.437号

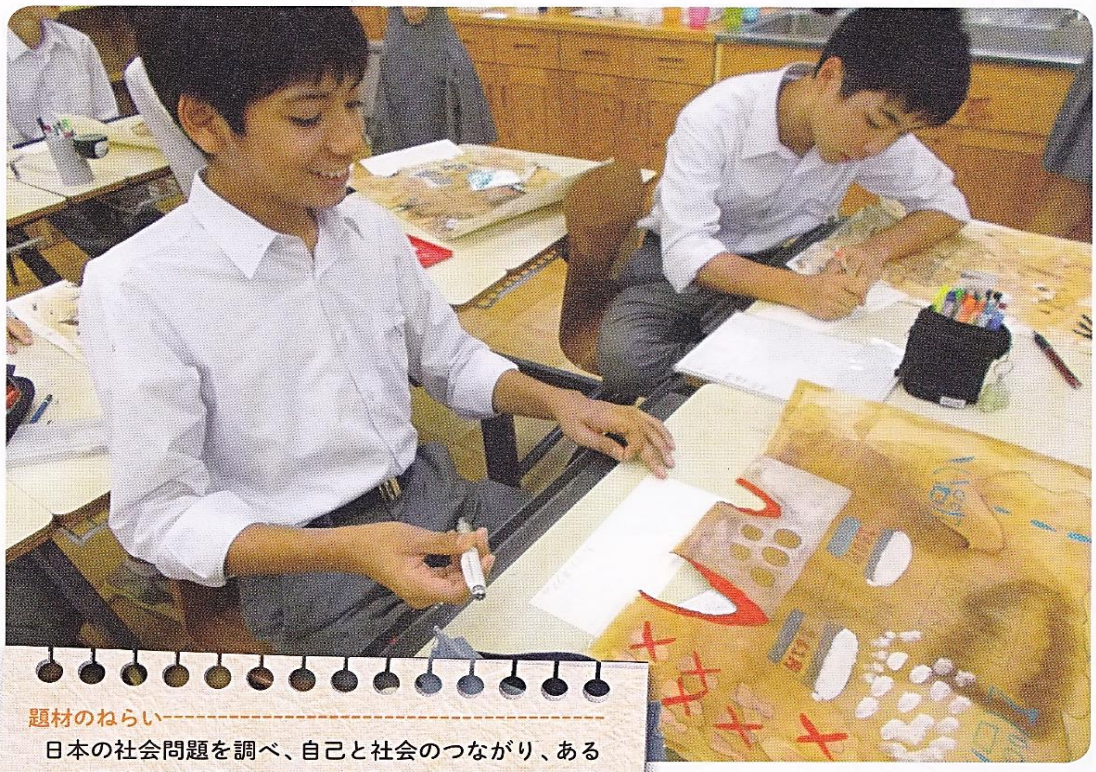
■岡本先生は、第62回・63回の造形教育研究大会（主催；造形教育をもりあげる会）に実践提案された先生です。次回64回大会でも、提案の予定です。

教材研究
［中学校］

社会問題を描く

■岡本（おかもと） 裕成（ひろあき）　神奈川県鎌倉市立第二中学校

3 年生　絵　8 時間



題材のねらい

日本の社会問題を調べ、自己と社会のつながり、あるいは他者との関係性について考え、資料をもとに作品を制作する。

用具・材料

マーメイド紙（四つ切り）、コーヒー、紅茶、鉛筆、アクリル絵の具、メディウム、ニス、ライター、写真、廃材など

評価の観点

関　日本の抱えている問題や、他国との関係、身近な問題に興味をもち、制作に取り組む。

発　主題を生み出し、資料からフォルムを単純化、強調化、抽象化しながら構想を練る。

創　主題を鑑賞者へ伝わりやすくするために、支持体や描画材料を工夫して表現する。

鑑　さまざまな作品の表現方法に触れ、社会問題に対する自分の考えや思いを視覚的に表現する方法について、幅広い見方、考え方を学ぶ。

晩婚化（代理出産）を取り上げた作品。

本題材は、生徒が自己と社会のつながりから、描くことの理由を見出し、主題を生み出していくことをねらいとした題材である。

授業の導入では、「社会問題を描く＝日本の現状報告レポートを制作する」というわけではないことを伝え、生徒一人一人に対し、「今の自分はどんな社会問題に興味をもち、どんなことを社会に向けて伝えていきたいのか」と投げかけた。次にいくつかの作家作品を紹介し、生徒たちの平面作品に対する見方や考え方を広げるように努めた。

まず紹介したのは、余白の美を感じさせる作品群である。たとえばアンドリュー・ワイエス「1946年の冬」は、父を失った悲しみの中で制作されたと言われている。一人の少年が坂を駆け下りている周囲には草原が広がっている。画面の余白に注目させ、そこに作者の心情やメッセージが込められていることを伝えた。その後、アンゼルム・キーファーや三瀬夏之介の作品のように、支持体に意図的な傷や硬い物質が盛られた作品は鑑賞者にどのような印象を与えるのかについて話をしたり、シュルレアリスムやポップアートの絵画など、現代社会の問題を特異なかたちで表現している作品を紹介したりと、生徒達の作品が写実性を重視した作品や説明的な作品に偏らないようにした。

絵画制作の段階では、最初にマーメイド紙の加工から始めた。生徒は、自分の考えた作品のコンセプトに合わせて、持参した紅茶のパックやコーヒー等で紙を染め、タオルや霧吹きでマチエールをつくり、その上からメディウムをのせる、穴を開ける、燃やす等の加工を施した。制作が進む中で、当初に掲げていた主題やコンセプトが曖昧になってくる生徒がいたため、個別に話をしたり、作品を回収した際に絵の裏にコメントを書いて返却したりすることをくり返して完成に向かっていった。

今回は自分の設定した主題に対するふり返りをより明確にするために、コンセプトを書いたワークシートも作品の一部として、絵に合わせた装飾や加工を施し、作品に添付した。ワークシートには理想的な答えよりも、現時点での自分の率直な意見を書いたほうが、絵の解説として自然なものになると思い、あまり問題の実態について興味がもてなかった生徒には、正直に今の自分の心境を書かせるようにした。

完成後は、校内に作品を掲示し、互いの表現の工夫を鑑賞し合うとともに、さまざまな社会問題への理解を深めた。生徒の中には、日本の社会問題にとどまらず、世界を視野に入れ、人権、性、暴力、高齢化社会などの問題を扱っているケースもあった。

本題材をきっかけに、世の中のさまざまな問題を身近なものとして捉えてもらえるとうれしいと思う。

学習の流れ

① 作家作品の鑑賞を通して、余白やミクストメディアの表現について知る。

② 資料を集め、アイデアスケッチを行いながら、作品の主題を明確にしていく。

③ マーメイド紙に、コーヒー、紅茶、絵の具などを用いて加工を施す。

④ アイデアスケッチをもとに、作品を制作する。

⑤ 完成した作品に、絵のコンセプトが書かれたワークシートを添付する。

⑥ 作品を掲示し、互いに鑑賞し合う。